

磐城教会をお訪ねして

熊江 秀一（新津教会牧師）

教区宣教部社会活動協議会（9月18日～19日・水戸教会）の帰路、磐城教会をお訪ねしました。協議会で桃井和馬氏より福島第一原発事故による放射能汚染問題も含めた講演を伺い、また水戸中央教会・水戸自由が丘教会をお訪ねした後のいわき訪問は、深い祈りの時でした。高速道路を下り、勿来教会、さらに津波の爪痕残る沿岸の道を経ていわき中心部に入りました。今回の訪問の目的の一つは関東教区で取り組んでいるいわき市でのボランティアでした。特に平日の数が少ないと聞いていたので、磐城教会に宿泊させていただき、市のボランティアセンターの働きに参加させていただく予定でした。しかしボラセンを訪ねたところ、9月から募集が変わり、木曜・金曜・土曜のみのボランティア募集となったそうで、働くことはできませんでした。被災地の片付けが進んだ結果か、平日のボランティアが少なすぎたことによるのか、気になるところです。これからいわきボランティアを計画される場合は、市のボラセンによくお確かめ下さい。

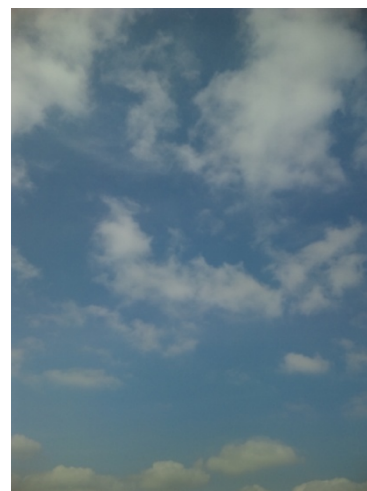
当初の目的は果たせませんでした。磐城教会の上竹裕子牧師とお話しでき、またいわきの町をゆっくりと歩くことができたのは感謝でした。磐城教会はJRいわき駅からもあまり遠くない市の中心部にあります。しかし町を歩いて人通りが少なかったこと、特に公園や外で子供が遊ぶ姿がなかったことが印象的でした。その一方、屋内のショッピングセンターや飲食店の駐車場は一杯でした。やはり放射能汚染の影響があるのかもしれませんが。いわき市中心部は0.18マイクロシーベルト/hという公の発表ですが、場所によっては1～2マイクロシーベルト/h程度の数値もあるようです。しかも上竹牧師のお話で驚いたのは建物の裏地、雨どい下の水が溜まり、じめじめした場所は放射線が蓄積し、非常に高い濃度の数値が出るそうです。社会活動協議会で桃井和馬氏が映像で示して下さったカウンターの数値と同じ高濃度が人々の生活しているただ中にもあることを思わせられました。上竹牧師がこのことを市役所に問い合わせたところ、ブルーシートでもかけておいて下さいとの回答だったとのことでした。国や市・行政による除染対策がまだまだ遅れていることを思わせられました。幼稚園の園庭の除染はできても、教会建物の裏地の高濃度部分をどうすることもできない現状があります。これは磐城教会だけでなく、原発周辺の教会が抱える問題のようです。教団・教区でそのような除染の専門家を派遣して、それぞれの教会や地域の不安を取り除くことができたらと願います。

上竹牧師とは共通の知り合いがあり、和やかにお話しすることができました。また茨城地区の教師会に招かれたこと、関東教区のお支えを心強く思っておられることも伺いました。何よりもいわきの地で地域の方々と共に歩み、伝道・牧会しておられる姿に励まされました。関東教区内の教会の復興と共に、いわきや原発周辺の教会を含め、東北教区・奥羽教区の被災教会の復興のために祈り、そして共に歩んでゆきたいと思います。

田んぼのある風景

小池 正造（東新潟教会）

青森の片田舎で育った私は、田んぼのある風景が好きです。ちょうど今の時季、実った稲穂が黄金の絨毯のように輝くのも好きですが、梅雨前の、青々と育った稲が風にそよぐのをしゃがみこんで同じ目線で眺めているのがとても好きです。3月の地震直後、お訪ねした日立教会の庭先で平山牧師の「こんな時でも花は咲くんですね」との一言が頭に残っています。9月26日から29日にかけて、仙台にボランティアに行く車中から、稲刈りの進む光景を眺め「こんな時でも収穫はできるんだ」と思っていました。会津、郡山、福島、白石と高速道路沿いの田んぼでは、収穫作業が進んでいました。放射能汚染の問題などの報道を耳にしていたので、少しホッとしました。ところが、ボランティアで伺った仙台市七郷地域では、津波の防波堤となったとされる仙台東部有料道路を境に光景が一変します。田んぼに稲がありません。田んぼに自動車があります。根っこの付いたままの松の木がそのままに転がっています。田んぼに島ができていました。すがすがしい空の下を吹く風が、実った黄金の絨毯の上を吹き抜けるのではなく、ヘドロの異臭を運んできます。あれからもう半年も経ったのに、と思っていました、まだ半年しか経っていなかったのだな、と思わされました。



伺ったお宅での作業は、田んぼのがれき拾いでした。でも、見た目は田んぼではありません。



津波がすべてを持って行ってしまい、津波が訳の分からないものを持ってきてしまい、空き地になっていました。そこにあるはずの畦道すら津波は消し去ってしまいました。空き地の片隅にポツンとたたずむプレハブ小屋を、勝手に所有の農機具小屋かと思っていたら、津波が持ってきた粗大ゴミだと教えてもらいました。重機で大きながれきを取り除かれた田んぼに埋まった陶器やガラスの破片、プラスチックや木片、石ころを拾い集めました。時折、スプーンや衣服の切れ端、色の抜けた写真が土から顔を出しています。そこに、生活のあったことが伺い知れます。原稿を書くに

当たって、インターネット（yahoo、google）でこの地域の地図検索をしました。1つの地図では震災前の様子が、1つの地図では震災後の様子が掲載されていて、沢山の人たちの生活のあったことが分かります。

伺ったお宅のおじいちゃんが話してくれました。今年は麦を植えて土壌調整をしたのだ、と。来年は畑に野菜を植える、と。3年後にはヒトメボレを植える、と。5年後には美味しいお米を食わせるから遊びに来い、と。82歳のおじいちゃんは笑顔で話してくれました。

あらためて知りました。田んぼのある風景は、誰かが作ってくれたものだったと言うことを。人の手が加えられなければ、見られないのだ、と。七郷に黄金の絨毯が敷かれた時、この地の復興があるだと思わされました。また、おじいちゃんの写真に会うために、仙台に行きます。